救いの門であるキリスト

ヨハネ福音書10:1-10
【新改訳 2017】

10:1 「まことに、まことに、あなたがたに言います。羊たちの囲いに、門から入らず、ほかのところを乗り越えて来る者は、盗人であり強盗です。
10:2 しかし、門から入るのは羊たちの牧者です。
10:3 門番は牧者のために門を開き、羊たちはその声を聞き分けます。牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。
10:4 羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。
10:5 しかし、ほかの人には決してついて行かず、逃げて行きます。ほかの人たちの声は知らないからです。」
10:6 イエスはこの比喩を彼らに話されたが、彼らは、イエスが話されたことが何のことなのか、分からなかった。
10:7 そこで、再びイエスは言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしは羊たちの門です。
10:8 わたしの前に来た者たちはみな、盗人であり強盗です。羊たちは彼らの言うことを聞きませんでした。
10:9 わたしは門です。だれでも、わたしを通って入るなら救われます。また出たり入ったりして、牧草を見つけます。
10:10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。

【祈りながら考えよう】

（１）1節と８節の「盗人や強盗」とはだれのことを指していますか。

（２）なぜ羊たちは、真の牧者の声を聞き分けることができるのですか。

（３）なぜイエスは、「唯一の救いの門」であると言えますか。

【解　説】

（１）盗人であり強盗とはだれのことですか

今日の個所は、9章で、「目が見える」と言っていたパリサイ人たちと主イエスが論争された出来事の続きである。

主は、まず1-5節でたとえを語っておられるが、そのたとえを聞いたユダヤ教の指導者たちには、それが何のことか分からなかったので、主は、そのたとえの説明を7節以下でしておられる。

パレスチナでは、羊の囲いは、石などを積み上げた高い塀で囲った所で、夜になると羊飼いは羊をこの囲いの中に入れ、野獣から守る。この囲いには、門があって、そこには門番が門の戸の開け閉めをする。羊はこの中に入っている限り安全である。主がここでまず教えられたことは、こうである。

「まことに、まことに、あなたがたに言います。
羊たちの囲いに、門から入らず、ほかのところを乗り越えて来る者は、盗人であり強盗です。」（1節）
「わたしは羊たちの門です。わたしの前に来た者たちはみな、盗人であり強盗です。
羊たちは彼らの言うことを聞きませんでした」（8節）

盗人とか強盗と言われているのは、だれのことを指しているのか。門であるキリストを通らず、それを避ける者たちであるから、ここでは聴衆であるユダヤ教の指導者たちのことであることは明らかである。

盗人とは、自分のものでないのに奪い取っていく者のことである。そして強盗とはその際に暴力を振るう者のことである。パリサイ人は盗人であり、強盗であった。彼らはユダヤ人を支配しようと試み、ユダヤ人が真のメシヤを受け入れないようにするためにはあらゆる手を尽くして妨害した。またイエスに従う者を迫害し、ついにはイエスを死に至らしめたのである。

（２）牧者であるイエス

「しかし、門から入るのは羊たちの牧者です。門番は牧者のために門を開き、羊たちはその声を聞き分けます。
牧者は自分の羊たちを、それぞれ名を呼んで連れ出します。」（2-3節）

「**門から入るのは羊たちの牧者です**」とはイエスご自身を指している。主はイスラエルの家の失われた羊のところに来られた。羊たちは牧者の声を聞いた。羊たちはその声が真の牧者であることに気がついた。羊が自分の牧者の声を聞き分けるように、主イエスがメシヤだと気がついた。この福音書の至る所で、牧者が「**自分の羊をその名で呼んで**」おられるのを見る。第1章では、主が何人かの弟子たちに呼びかけられ、主の声を聞いた彼らはみな、それに応答した。第9章では主は盲人に呼びかけられた。

「**連れ出します**」という表現は、ユダヤ教という羊の囲いからご自身の声を聞いた人々を主イエスが連れ出された、という事実を指すのかもしれない。そこで羊たちは出口をふさがれ、閉じ込められていた。律法のもとで自由は存在していなかった。主はご自分の羊を恵みの自由の中に連れて行かれた。前章でユダヤ人は、盲人であった男を会堂から追い出した。そうすることによって、自分たちは気がついていなかったが、彼らは主の働きに手を貸していたのであった。

（３）羊たちは聞き分ける

「羊たちをみな外に出すと、牧者はその先頭に立って行き、羊たちはついて行きます。彼の声を知っているからです。
しかし、ほかの人には決してついて行かず、逃げて行きます。ほかの人たちの声は知らないからです。」（4-5節）

真の牧者は「**羊たちをみな外に出すと**」、追い立てるのではなく、羊を導き出す。牧者は、自分で行ってもいないところに羊を行かせることはない。彼は常に、救い主、導き手、そして模範として羊たちの前に立たれる。本当にキリストの羊である者はキリストについて行く。彼らはその模範に従って羊になるわけではない。新しく生まれることによる。そして救われる時に、主が導かれるところに行きたい、と願うようになるのである。

羊は、本当の牧者の声を聞き分ける感覚と識別力を持っており（Ⅰヨハネ2:20）、「**ほかの人にはついて行かず逃げて行く**」。ほかの人とはパリサイ人および、他のユダヤ人の指導者である。目が見えるようになった男はその好例である。彼は主イエスの声を聞き分けたが、パリサイ人たちはほかの人であることを知っていた。それゆえに、たとえ除名されるとわかっても、彼は彼らに従わなかったのである。

さらに主はご自身を「**羊の門**」として示された。もはやユダヤ教という羊の囲いに入るというのではなく、むしろイスラエルの選ばれた羊がユダヤ教を離れて、門なるキリストのもとに来ることを描いておられる。

（４）イエスは門である

「わたしは門です。だれでも、わたしを通って入るなら救われます。また出たり入ったりして、牧草を見つけます。
盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。
わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。」（9-10節）

主イエスは「**門**」である。「**だれでも、わたしを通って入るなら救われます**」

救いとは、キリストを通して初めて受けられるものである。バプテスマでは不十分である。聖餐式でも不十分である。私たちはキリストにより、またキリストが与えて下さる力によって入るのである。

主は、山上の説教でこう教えられたことがある。「**狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです**」（マタイ7:13-14）。

またこの福音書の少し後で、主はこのようにも教えられました。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、
だれも父のみもとに行くことはできません」（ヨハネ14:6）

これらはみなおなじことについて語っておられる。主は、ご自分以外に救いの道のないことを、あらゆる機会に、言葉を変えて教えられた。特に「**わたしは門です**」と言って、それ以外の所から救いに入ることのできないことを言明された。

この招きはだれにでも差し伸べられている。キリストはユダヤ人にも異邦人にも等しく救い主であられる。しかし、救われるためには、入らなければならない。信仰によってキリストを受け入れなければならない。それは個人的な行為であって、それなしでは救いはない。実際に入る者は、罪の刑罰から救われるだけでなく、罪の力からも、そしてやがて罪の存在そのものから救われる。

救われた後、「**出入り**」が始まる。おそらく、神の前に、信仰を持って礼拝のために入って行き、世に主の証しをするために出て行く、という考えが背後にある。いずれにせよ、この個所は主に対する奉仕における、全き安心と自由を描写している。入る者は「**牧草を見つける**」。キリストは救い主、また自由をお与えになるお方であるだけでなく、養い手であり、満ち足らせてくださるお方でもある。主の羊たちは、神のことば、という「**牧草を見つける**」のである。